Column 4

「いのち」と対峙するデザイナーこそ、これからのデザイナーである

川崎和男 Kazuo Kawasaki

デザインディレクター
博士（医学）
大阪大学大学院 教授
名古屋市立大学大学院 名誉教授

PROFILE

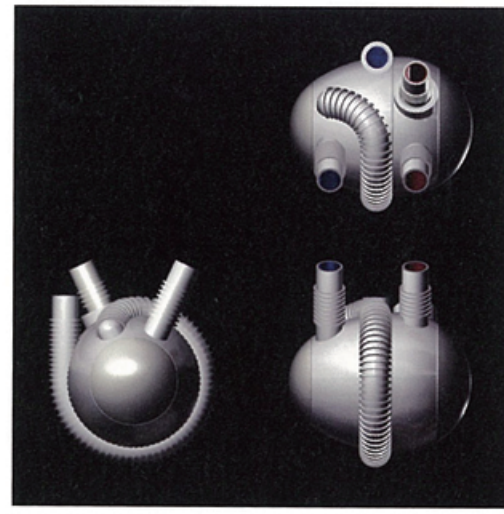
デザインディレクターとして、伝統工芸品からメガネ、人工臓器、先端医療、海事戦略、宇宙空間の装置化などまで幅広く研究、教育、実務活動を行う。
国内外の受賞歴多数。主要美術館に永久収蔵、永久展示多数。

すでに資本主義経済システム、インダストリアリズムは終焉している。これは「デザインという職能」に対して、革新と変革が求められている。したがって、デザイナーになるためには、デザイン教育を受ける基本的な姿勢を変革しなければならない。

私は現在、旧帝大・大阪大学大学院にて、「先端デザイン」を提唱している。デザイン理工学・デザイン医工学・デザイン文理学・デザイン政経学という領域でその先端デザインを構成している。理工学・医工学・文理学・政経学いずれも、これまでの理系＋文系を基盤として芸術・デザインの造形力が求められている。

すなわち、デザインは学際化する実務学でなければならないという、私がデザイナーとしての経験と今後への展望があるからである。これまでの美大系・工学系・教育系でのデザイン教育にはすでに限界がある。これからのデザイナーは、情報学・コンピュータを駆使し、設計学・レンダリングという描写力から図面表現が求められる。さらに計画学・数理思考力が必須である。なお、他専門分野への論理性は論文作成の編集学で科学的な提案をしていく必要がある。

特に、これまでのデザイナーには、数学と作文能力は無視されてきた。しかし私は現在、「デザイン数理学」の基盤構築が最も重要だと主張している。すでに、文系や理系という能力の選別では、デザイナーとしての資質形成は困難である。「絵が描けること、作文の背景には数学的な論理性を配置し、創造・造形に向かう」姿勢を私は求めたい。



なぜなら、「かたち」で「きもち」を動かし「いのち」と対峙するデザイナーこそ、これからのデザイナーであると考えるからである。デザイナーは少なからず、修士号取得が必然であり、博士号のあるデザイナーでなければ、社会的、時代的な発言力や表現力、そして伝達力を裏づけることはできないと判断している。